

# 発 明 文 化 論

〈第 41 回〉

丸山 亮

## イヌイットの版画

かつてエスキモーと呼ばれていた人たちは、いつのころからかイヌイットと呼ばれるようになった。エスキモーには「生肉を食べる者」の意味があると誤解され、侮蔑的だという意見が出て、イヌイットに言いかえられたのだ。アメリカの黒人やインディアンの呼称がしばしば変わるのとも平行している。

ところでイヌイットの一般的なイメージは、そりに乗って移動しながら魚やアザラシなどを狩りし、氷の家に住むといったものだろう。さらに近年は欧米文化の影響で伝統的な生活が破壊されて、アルコール依存症が多発しているとも伝えられる。けれども彼らの創造的な営みには、これまでほとんど目が向けられなかった。

いま手元に、アザラシの牙をきれいに磨いたおみやげがある。白いエナメル質の牙とそれを支える骨で5センチほどの長さ。かつて来日したイヌイットのアーティストがくれたものだ。そのとき彼らには工芸の技術とともに、当然ながら身体表現や芸能もあることを知った。

先ごろカナダ大使館内のギャラリーで「旅する版画 イヌイットの版画の始まりと日本」と題した展示があり、散歩のついでにのぞいて見た。

動物や伝説などの版画が、なんと和紙の上に刷られて並んでいる。素朴で淡い味わいの図柄や刷りが好ましい。解説によると、イヌイットのこうした版画の創作は1950年代後半に始まったというから、まだ半世紀の歴史しかない。けれども彼らの到達した境地は、既に相当な域にあるように思われる。

日本の素材である和紙と彼らの版画が結びつくには、きっかけがあった。カナダ政府の職員で画家のジェームス・ヒューストンが1950年代の末、日本に滞在し、版画家の平塚運一に師事した後、イヌイットの居住地で技法を伝えたのだという。和紙を使うことや落款のようなスタンプ、刷りの分業化などは浮世絵に由来するようだ。また、日本の民芸運動がカナダ人の画家を介してイヌイットにまで広がったと見ることもできよう。今では作品が高価で買い上げられる国際的なアーティストもいるらしい。

国連は先住民族の権利宣言を2007年に採択し、その専門機関のUNESCOやWIPOでは彼らの文化的表現を保護する仕組みが議論されている。だが、彼らの創造的な活力を現代に生かす方向は手探りが続く。そうした中でイヌイットのアーティストが、異文化を取り込んで新たなハイブリッド・アートを生んでいるのは大いに注目している。オーストラリアのアボリジニーが彼らの夢や神話の世界を西洋風なキャンバスに定着させた絵画は、原住民の表現と植民者のもたらした西洋技法との結びつきだ。イヌイットの版画はそうした過程をたどらないで、はるか古代に遡るモンゴリアンとしての同根に出会った。

他方、彼らの伝統文化が、現地の商業主義におびやかされている現実も無視できない。イヌイットが狩猟などに使ってきたフローエッジ・ボートと呼ばれる乗り物がある。1980年代、これにヒントを得た現代風デザインのボートがカナダ政府の肩入れで開発されたとき、その特許をとろうとして調査したところ、イヌイットとは無関係な会社によって既に特許の網が張られていたことが判明。彼らは特許出願をあきらめるほかはなかった。また、スヌメイマックスと呼ばれるブリティッシュ・コロンビア州の原住民は岩に刻んだ模様を大事にしてきたが、これが現地商業資本の目をつけることとなり、コーヒーショップや音楽祭のロゴに使われるといったことも起こった。伝統的な知的財産を保護する制度が無力なとき、守りよりも創造によって進もうとしている彼らの努力は貴い。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)